

ミレニアム特集

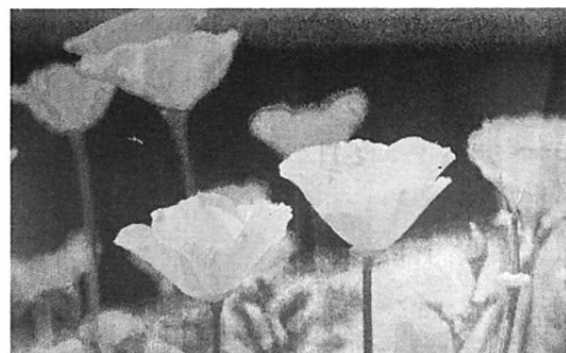
仕事を通してスウェーデンで思う事

インテリアデザイナー&テキスタイルアーティスト 川上 玲子

この一年はテキスタイルデザインを自ら行うことにより、インテリアデザイナーとして使う立場で見えてきました。日本製、外国製品こだわらず、目的に合った物を選ぶためにショールームを回ったり、片っ端からカタログを開いてページをめくっても、何か違うのです。複雑な柄や色は数多くあってもインテリアに使える物、使われた時に引き立つものが欠けているような気がしてなりません。使われた時のイメージを前提に生産されているのでしょうか、疑問が生じます。

日本のデザイン、生産技術も他の国々と比べて高度にもかかわらず魅力ある製品が少ないと思うのは私だけでしょうか。残念でなりません。仕事柄、年に数回スウェーデンに来て家具やテキスタイルの打合せをこちらのデザイナーやメーカーの人たちとする機会がありますが、ショールームに限らず、街を歩いてもテキスタイルの美しさに刺激を受けることが度々です。それはテキスタイルそのものの美しさも然る事ながら、加えて実に素晴らしい使われ方がなされているからだと思います。トータルで表現された布は、使われた環境によって魅力も倍増するのでしょうか。

先日、建築家とプランの段階から共同で3階建の住宅のモデルハウスを設計、デザインして鎌倉にオープンしました。テーマを「新しい和」としたため、設計当初から使いたいテキスタイルのイメージも決まっていたのですが、結局、モダンな和をイメージするシンプルで素材とデザインが生かされたテキスタイルは日本にはなく、スウェーデンでは使いたい布、空間を生かす布が迷うほど豊富なのは皮肉なことです。それらは取り立てて新しい今年の新柄というわけではなく、一つのデザインを大事に扱う国民性と使われるイメージを描き生産に乗せるまでの丹念な開発努力と市場に出た時の営業努力が重なり、タイムレスデザインとして人々に愛され続けている物が多いのです。自分たちで作り上げたデザインは会社をあげて社長自らデザインを理解し売ろうとする姿勢は、使う側にとっても説得力があると言えます。今や60年代のデザインが世界の若者たちに復活していると日本の雑誌でも取り上げられていますが、ここスウェーデンではプリントテキスタイルは時を越えて今も新鮮なイメージを保ち、数十年見慣れていたテキスタイルでさえ、次のプロジェクトはこのデザインをメインにインテリアを構成したいと思うアイデアが湧いてきます。それらは量産の商品であっても、アートなのです。テキスタイルに限らず、家具、照明器具、すべて、生み出す側のデザイナーはアーティスト、その精神が優れた量産品を市場に送り、一般消費者の意識を啓蒙していると言えます。



「野の花ポピー」 テキサスダラスセンター タピストリー (展覧会パンフレットより)

私は今、4月に福岡に同時にオープンする2棟のモデルハウスのため、スウェーデンにきています。アパートに着いて留守中の郵便物の整理をしていると一通のオープニングレセプションの招待状がありました。レセプションは過ぎていましたが展覧会は会期中でしたので早速観にいきました。アメリカで活躍しているスウェーデンのタピストリー作家「HELENA HERNMARCK」の1964年から現在に至るまでの作品を世界各地から集められた展覧会で、中でも1978年に制作されたテキサスのダラスセンターのための「野の花ポピー」と題された大作は日本でも知られていますが、実物を目の当たりにして、その色の美しさと織りの単純なテクニックにも拘らず表現力の素晴らしさ。写真では窺えなかった微妙な色の変化、その美しさはスウェーデンの人たちが愛する自然の色でもあり、また街で目にする商品にもそれは言えます。「スウェーディッシュグレース」と呼ばれる共通点。それはスウェーデンのデザイン全体が醸し出すエレガンスなのでしょう。

今回の目的である2棟のモデルハウスの空間を構成するテキスタイルイメージは既に描いていましたので街に一步出た途端、使いたい物は難なく見つけることは可能でした。デザイン意欲が湧いてきます。2棟のイメージをそれぞれ、私なりの「クラシックモダン」と「オリエンタルエレガンス」で対照的にインテリアを創るためにはテキスタイルが重要なポイントになります。昔から売り続けられている布が存在していることが私にデザインイメージを生み出してくれる要因なのでしょう。

しかし、私もテキスタイルデザイナー、最後に自分の空間を引き締めるカーベットは、やはり自らのデザインで日本の技術を生かした物を作り、使うことでインテリアデザインの仕事の楽しさを味わっているのかもしれない。